

偉大な母性

おはようございます。

お母さん達に質問します。「子供さんたちの為に神様に願いたいことがある方は、手を挙げて頂きます」。やはりいらっしゃるんですね。手を挙げてくださったお母さん方にもう一度質問します。「願うことの中で、これは必ずかなえられて欲しい、成し遂げられて欲しいと懇切に願うことはありますか？」さすが、ありますよね。これが過去、現在、未来そして全世界のお母さんの心です。このように子供に対して持っている母の心は変わらないことだと思います。

そうしたら、まず、大事なことはその子供達の事を願う心が正しい事かどうかを神様の前で識別することだと思います。そして、子供に対しての願いが正しいと確信が出来たら、絶え間なく祈ることになります。

3 回目の質問です。「子供達の願いの為に、懇切に絶え間なく祈っています」という方は手を挙げてください。すばらしい！ありがとうございます。そうです、願う事で終わってしまったらそれは何の意味もありません。犬も本能的に自分の子供の為に命を分けます。動物と人間と逢う所は、必ず自分が感じている正しさを実践しようと自分を投げる事です。自分を投げる事を避けながら、子供の為に一生懸命願う事はありえない事と思います。

今日の福音(マタイ 15・21-28)ではイエス様は今までと違った反応の姿を見せています。悪霊に取りつかれている人がイエス様に助けを求める場合、いつも面倒がらないで暖かいやさしい姿を見せ、そしてその場で悪霊を追い出してくださるのが今までの姿でした。しかし今日はいつもと違った反応を見せて下されます。あるカナンの女性が悪霊に取りつかれて悩んでいる娘の為に懇切に願っています。「ダビデの子よ、私を憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」。強く強く願っています。しかしイエス様は意外に口を閉じます。何も見ずにただ歩きます。しかしこの女性があまりにもうるさく、叫びながらついて来るので、我慢できなくなった弟子達が「先生、なんとかして下さい。この女性はうるさく、ずっと付いてきます」と頼むと、イエス様は今までと全然違う言い方をします。「私は、イスラエルの家の失われた羊のところしか遣わされていない」と断りました。しかし、カナンの女性は諦めずにしつこく願い続けます。「主よ、どうか、お助けください」。そうすると、イエス様は「子供のパンを犬にあげてはいけない」とまたご自分らしくない意外の返事を見せました。しかし、このように侮辱的な言葉を聞いても女性は「食卓から落ちた食べ物は子犬もいただけるのではないのでしょうか？」と返事します。その話を聞いてイエス様は感嘆します。「立派な信仰だ。あなたの願いどおりになるように」と。

この物語について、皆様はどう思われますか。もしここでイエス様が「人が食べるものを犬にはあげない」と話されたらどうします？ 皆様の事を犬と例えられたら、どのような気持ちになるのでしょうか？ 死ぬほど腹が立つことになるんじゃないですか？ 今まで信じて来たイエス様にこのようにありえないことを言われたら、それは衝撃であり、ものすごい悲しみになりますよね。

さあ、整えてみましょうか。私たちがこの女性に見習うことは何でしょうか。まずカナンの女性が見せた力ですね。自分が願う心、望む心の為に粘り強く委ねることです。めんどくさいと言われるくらい自分を捨てて自分の子供の為に自分を投げ出す姿だと思います。

二つ目はどのように侮辱されても、「私はあなたが娘を癒してくださる事を信じています。確信しています」ということに全てをかけて、「私は犬になっても構いません。自分の娘を癒してくださるのなら、犬よりもっと悪い物にもなれます」という母性でしょう。結局へりくだる信仰、謙遜な信仰です。

謙遜とだんだん離れていくのが人間の一つの弱さです。信仰も同じです。私たちは一生懸命教会や奉仕の生活をしながら、自分が知らないうちにだんだん傲慢に囲まれてしまいます。「あの人はなんでそういう姿を見せるのだろう。あの人はなんでそういうやり方を見せるのだろう」としながら、自分がちゃんとできているような姿を見せるのです。

もう一度振り返ってみましょう。私たちは死ぬまでこの女性が見せてくれた、へりくだる心を持ってイエス様に付いていかなければならないのです。

私たちが全然理解できない事をいただいてもそこには御旨があります。今日の福音にこんな言葉があります。「ごもってもです」。このような心が私たちに許されていれば、懇切に強く願っている子供の為の願いもかなえられ、成し遂げられると信じます。

ありがとうございました。